

舟橋尚道先生のご逝去を悼む

早川 征一郎



1998年8月3日（月）午後11時10分、舟橋尚道先生が、肺炎で亡くなられた。享年73歳であった。近年、胃の手術をされたり、何かと病気がちでおられ、そのことを私も気にかけてはいたが、とにかく突然の訃報であった。

舟橋先生は、この『大原社会問題研究所雑誌』1998年4月号に、書評『『社会政策叢書』編集委員会編『今日の賃金問題』』（啓文社、1997年）をお書きになっておられる。私の知るかぎり、この書評が、公表された最後の文章ではないかと推測している。

*

舟橋先生は、かつて法政大学法学部教授であり、法政大学常務理事も務められた。だが、1948年2月、当時は法政大学とはまだ、つながりのなかった大原社会問題研究所の所員として採用された。それ以前は、全日本炭鉱労働組合（全炭）の書記をしておられ、大原社会問題研究所への入所は、戦後、『日本労働年鑑』の復刊にあたり、欠かせない人として、ぜひにと願われての入所であった。そして、事実、戦後復刊した『日本労働年鑑』第22集では、文字通り中心的役割を果たされた。時にまだ、20歳台の半ばであった。

その後、1949年7月、法政大学と大原社会問題研究所との合併を契機に、法学部の専任教員となり、同時に大原社会問題研究所の所員となった。そして、法政大学を退職される1995年3

月末まで、大原社会問題研究所の所員であった。その間、研究所の所長を初め、役員も長年、務められた。大原社会問題研究所では、その先生の長年の功績を多として、研究所の名誉研究員に推挙した。

*

先生の「大原社会問題研究所での研究員としての研究活動は、約45年に及んでおり、一言では言い表すことができない。だが、敢えて例示的に書けば、まず『日本労働年鑑』の編集や執筆に関わること、および研究所の調査・研究活動であった。『日本労働年鑑』については、第22集の戦後復刊で、執筆、編集の中心的役割を果たされたのち、労働経済の動向や賃金政策などを中心に長年、執筆し、また編集のアイデアの提供や執筆者の世話や研究会など、多面的に貢献された。

研究所の調査・研究活動では、先生の研究活動が、まず賃金論から始まったことと大いに関係がある。戦後の大原社会問題研究所が、『日本労働年鑑』の復刊と並行して始めた調査研究の成果の発表として、「大原社会問題研究所シリーズ」があるが、その第1号は、舟橋先生の『賃金統制と賃金闘争』であった。入所後、間もない1948年8月に発行されている。翌年には、『労働資料月報』が発行されはじめたが、その第3号には、『最低賃銀制の意義』を発表された。その後、経済安定本部など官庁からの委託

調査を研究所が引き受けるなかで、舟橋先生も積極的に参加し、成果のまとめに貢献された。『賃金の階層別変動とその原因』（法政大学大原社会問題研究所，1954年），『失業者の存在形態』（東洋経済新報社，1956年）などは、その代表的なものである。

*

その後も、大原社会問題研究所の月刊雑誌である『資料室報』（現在の『大原社会問題研究所雑誌』）などに書いたものが数多くある。

そのなかでも、最近の「賃金論研究と私（上）（下）」（『大原社会問題研究所雑誌』1996年9月号および10月号），「労使関係・社会政策・労働法論研究と私」（『大原社会問題研究所雑誌』1996年11月号）は特筆に値する。これらの論文は、舟橋先生が、これまでのご自身の研究全体を総括的に回顧され、先生の研究の軌跡をみずから率直に明らかにしたものとして重要である。そこには、略歴、主要業績も、先生ご自身の手でまとめられている。舟橋先生と同様な分野の研究者には、ぜひ一読に値する研究回顧である。

*

その舟橋先生は、さしあたり社会政策学会でも、重要な役割を果たされた。ここでは、法政大学紛争の最中の1969年から、翌年の1970年まで、社会政策学会の代表幹事を務められたことを記しておくに留めたい。なお、この時の学会事務局は、大原社会問題研究所が引き受けて

いることも記録として留めておこう。

*

舟橋先生の大原社会問題研究所での重要な役割として欠かせないのは、研究所の役員、所長として運営面での活動である。研究所が法政大学と合併したが、種々の理由で、1951年1月、財団法人になって以来、先生は、研究所の評議員となり、1966年4月からは研究所の常務理事となられ、1986年6月に、研究所が再び法政大学の附属研究所となり、財団法人を解散するまで続けられた。

それだけでなく、大原社会問題研究所の所長に就任し、研究所の運営にあたった。1970年4月から73年3月までの3年間、および1980年4月から85年3月までの5年間であり、通算8年間に及んでいる。法学部との兼務の傍ら、よく研究所に気配りし、ソツなく運営にあたっていたことが印象に残っている。

*

とにかくも、気性は淡泊で明るく、話好きの先生であった。時に、気短かであったが、すぐに生来の明るさに戻り、後に尾をひくことはなかった。だが、もはや、そうした舟橋先生と、たとえ電話にせよ、話をする機会は一切なくなってしまった。大変、さみしい気持ちがするが、いまは心からご冥福をお祈りするしかない。

（はやかわ・せいいちろう 法政大学大原社会問題
研究所教授・所長）